

作家栗本 薫(評論家名中島 梓)が亡くなりました。100巻で完結という本人のふれこみにもかかわらず、終わりそうにない『グインサーガ』の100巻目が出た時、どうするつもりだろうと少々あきれながらも、しばらくはこのまま付き合うしかないと思ったものです。でも、こうなってしまうと、結局、あの人はグインを永久に手放したくなかったんだな、読者の手には渡したくなかったんだな、と思うのです。 合掌。

さて、今回の特集は、この時期恒例の「教育実習生による図書紹介」です。実習生の皆さんは、この北野でいったいどんな本にどんな印象を持ったのでしょうか。この紹介で、これは！と思った本があったら、ぜひ図書館で探してみてください。

## 《教育実習生による図書紹介》

1. 北野に在籍していた時読んで印象に残った本
2. 後輩にぜひ読むことを薦めたい本

この2点で紹介していただきました。

### (保健体育科)

#### 2. 浅田 次郎 『霞町物語』 講談社

読み終わるとなぜか「かっこいい」と感じた短編集です。著者自身の高校生活のストーリーは暖かく、今でもたまに読み返したくなる、そんな作品です。

#### 2. 西田 文郎 『No.1理論』 現代書林

「成功者のプラス思考」について書いてある本で、こんな考え方もあるのだなと新しい発見があるはず。いろんなことに挑戦していく人に一度読んでもらいたいメンタルについての本です。

### (保健体育科)

#### 2. 水野 敬也 『ゆめをかなえるソウ』 飛鳥新社

普段、あまり本を読むことはないのですが…

この本もずっと家にあったけれど、手に取ることもなく放置されていました。

ある日、表紙のゾウと目が合って、ちょっと読んでみようかな…というつもりで読み始めたのですが、文章が関西弁で書かれていることもあり、とても読みやすく、どんどん読みすすめてしまいました。難しい内容ではないし、バカバカしく思うかもしれませんが、気分が落ち込んでいる時に読むと、ケロっとなっちゃうかも知れませんね。何気なく読んでもらうとおもしろいのではないかと思います。

### (保健体育科)

#### 2. 水野 敬也 『ゆめをかなえるソウ』 飛鳥新社

昨年テレビドラマにもなった作品なので、知っている人も多いと思います。ジャンルとしては、ビジネスマン向けの自己啓発本らしいのですが、小説のようなので、高校生でも読める内容です。ガネーシャという大阪弁を話す謎の生物が、夢をかなえるにはどうすればいいかということを、様々な著名人の例を

挙げて教えてください。気持ちの持ち方や実践することの大切さなど、色々なことが学べる作品だと思います。

## (保健体育科)

### 2. 海堂 尊 『チームバチスタの栄光』 宝島社

映画化、ドラマ化され、どちらも見たが、本が一番おもしろかった。続きが気になって、一気に読みたくなる本です。

海堂 尊の本はどれもおもしろいのでオススメです。

## (数学科)

### 2. 星 新一 ショートショートシリーズ 新潮社 角川書店他

私は北野高校の図書館で小説等を借りて読んだ覚えはありませんが、ぜひとも読むことをお勧めしたい本は、星新一さんのショートショートシリーズです。私は活字が苦手で、本を読むことが大嫌いでしたが、このショートショートは超短編集で、短いものになると、1 ページで一話完結なので、こんな私でも飽きずに読めます。短い中にも必ずオチがあり、余韻がじわじわときて、とても面白いです。ぜひ一度読んで、星新一ワールドを体感して下さい。

## (数学科)

### 2. 伊坂 幸太郎 『陽気なギャングが地球を回す』 祥伝社

人間嘘発見機、演説の達人、スリの天才、正確な体内時計を持つ女。

この4人は銀行強盗で、その戦歴は百発百中…のはずが…

大学の研究室においてあり、題名に惹かれて読んでみたらハマった小説。作中の数々の事件、登場人物の行動、そして彼らの一見何気ない会話が、最後に全て繋がる瞬間は、うならされること受け合いです。

## (公民科)

### 2. 瀬尾 まいこ 『幸福な食卓』 講談社 913-S14-2

映画にもなっている有名なお話です。「父さんは今日で父さんを辞めようと思う。」この一言から物語は始まります。すべての登場人物がしっかり際だっていて面白い作品です。当たり前の形を維持することの難しさや、家族や恋人の存在をもう一度見直すことに、気づかされます。ぐんぐん先が気になって引き込まれました。人が本当にあったかい物語です。

## (家庭科)

### 1. 松本 清張 『砂の器』 新潮社 913-M23-1

私はミステリーが好きだったのでこの本を読みました。が、これはただのミステリーではありませんでした。ハンセン病差別に苦しむ主人公の生き方から、社会的差別について考えさせられました。また、彼をとりまく冷たい人や温かい人、いろいろな人々の生き方にも考えさせられました。

### 2. 宮部 みゆき 『ブレイブ・ストーリー』 角川書店 913-M71-6-1~2

おもしろくて、次の展開が気になり、途中でやめられません。最後に「がんばろう!」と思わされるお話でした。元気を出したいとき、くじけそうな時、読んでみて下さい。

## (国語科)

### 1. 夏目 漱石 『漱石文明論集』 岩波文庫 081-I 1-7-10-0

「文豪」の本を、是非高校生の時に読んでみて下さい。『現代日本の開化』や『私の個人主義』など、漱石の講演や随筆などの入った本です。中でも随筆『硝子戸の中』は、生きるとはどういうことか、漱石が考えたり感じたりしたことに触れられる文章だと思います。

### 2. 幸田 文 『おとうと』 913-K17-5 『流れる』 918-K18-1-5 新潮社

怒りや淋しさ、悲しみ… 幸田文の文章は、感情がしみじみと伝わってきます。父 幸田露伴とのことを書いた『父・こんなこと』もお薦めです。露伴の『五重塔』081-I 1-7-12-1も読んでみて下さい。

### 2. 星野 道夫 『イニユニック[生命]』 新潮文庫

アラスカの原野を旅し、たくさんの写真と“絆”を残した星野道夫さんの本です。壮大な自然の営みを、全身で感じながら暮らす日々が綴られています。私がこの本に出会ったのは大学生になってからですが、皆さんには是非高校生の間に読んでもらいたいのです。

### 2. 辻 嘉一 『料理のお手本』『料理心得帳』 中公文庫

料理が好きな人や食べることが好きな人にお薦めしたい本です。『料理心得帳』の方が、読みやすいと思います。(料理好きの方は『料理のお手本』も是非どうぞ)

著者は、京都の茶懷石料理屋「辻留」の二代目の主人だったんです。明治生まれ・昔の京都の人・料理人と、三拍子揃った(?)偉大な方だと思います。背筋をのばして、ゆっくりと読みたい文章です。

## (英語科)

### 1. 伊集院 静 『海峡』 新潮社(3部作)

今より貧しい頃の日本。その時の少年が青年、大人へなっていく様子が見事に表現されています。今より貧しいけど、心は今より豊かだったように感じる作品です。

### 2. 伊集院 静 『機関車先生』 講談社

ある日突然、～島の小学校に、話すことが出来ない先生が来て…、先生と子供達が心を通わせていく様子に感動です。“話すことが出来ない”というのは一つの個性であって、障がいと見なしてはいけない、という思いを知ってほしいです!

### 3. サリンジャー『ライ麦畑でつかまえて(Catcher in the ray)』 白水社 933-S24-1

大学の授業で必要だったので読みました。一回目は「ん?」と思ったけど、とっても奥深いストーリーでした。子どもから大人になる間の、モラトリアムについての描写が良かったですよ!!

## (英語科)

### 1. アシュリー・ヘギ 『アシュリー～All About Ashley～』 扶桑社

私がアシュリーという女の子について知ったのは確か高3の時だったと思います。早期老化症(プロジェリア)を持って生まれた彼女の活動や言動から、生きる意味とは何か、若い自分にできることは何かについて考えさせられます。最近彼女の訃報を目にしたこともあり、是非お薦めしたいです。

## 2. 光成 沢美 『指先で紡ぐ愛ーグチもケンカもトキメキも』 講談社

全盲全ろうの大学教授福島さんと妻の物語。極限のコミュニケーション手段を通して、人と人のコミュニケーションの可能性について考えさせられ、心が温まりました。

### (英語科)

#### 1. 平野 啓一郎 『一月物語』 新潮社

高校時代、どこか幻想的で不思議な物語が好きでした。私は、この本の明治風の文体と複雑な漢字の見事な使い方に魅了されました。

恐るべし 現代の若手作家です。

#### 2. 小川 洋子 『偶然の祝福』 角川文庫

大学に入って、小川洋子にはまりました。そしてやや飽きたんですが、この短編集はオススメ。一日一篇ずつ、その不思議な世界観をじっくり味わって下さい。

#### 2. 天童 荒太 『悼む人』 文芸春秋 **913-T89-3**

人々の死と共にどう生きていくか。死を真正面から、また、様々な角度から捉えた作品。だけど、読みやすいです。ラストは予想がつくけど、やっぱり泣いちゃいます。

### (物理科)

高校時代に発売されて話題のマトとなり、賛否両論の嵐が巻き起こった『**バカの壁**』**304-Y11-1** (養老孟司 新潮新書) は、おそらく今までで一番大きな影響を私に与えたと思います。チマタではその難解さのみが取り上げられたような状態だったようですが。今思い返すと、たしかその時に私が感じたのは、「似たような考えを持った人が居た！」というものだったような（実はよく考えるとあたりまえで、哲学で議論されまくっていることばかりだったわけですが）気がします。実習生の立場から Keyword を挙げると、「相対化」、「科学という思想」、「病（とらわれ）」、「心身問題」「認識の枠組みを持つ者 持たざる者」、「情報のバイアス」でしょうか。まあ、色んな解釈 がなされると思うので一読を。

他には養老孟司氏にからんで、甲野善紀氏の各著作もおすすめしたい。「科学」という枠組みを一度相対化し、その上で実践して身を委ね、観察、そして試行錯誤しないことにはわからないし批判もできない。身体操法については、見る価値あり。

そろそろ理系の本を挙げておきましょう。森先生の著作『**すうがく博物誌**』

(童話屋) **410-M21-22-1**。森一刀斎先生のユーモアは一度見ておけということです。数学の印象が変わるかも。太郎次郎社の『遠山啓のコペルニクスからニュートンまで』にも森一刀斎はかかわっていたり。なおこの本は、物理と思想を市民講座で語った内容をまとめた本です。卒業生つながりで、手塚治虫がかかわった『アトム対ユリシーズ』もどうぞ。